

# 小 論 文

## 地域科学部

### 問 題 冊 子

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 本冊子は大問 **I** ・ **II** および各問題の後に付した下書用紙の合計12ページです。
3. 試験中に、落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れなどに気がつき、解答にさしさわった場合には、直ちに試験監督者に申し出ること。
4. 受験番号は、5枚の解答用紙のそれぞれの指定された場所に、必ず記入すること。
5. 解答は、解答用紙の指定箇所に、正確な、読みやすい字で記入すること。
6. 解答用紙は、必ず提出すること。
7. 問題冊子は、持ち帰ること。
8. 大問ごとに、満点に対する配点の比率(%)が表示してあります。

I 以下の文章は、東畑開人「マスクと人間らしさ 自由再発見へのリハビリ」【社会季評】朝日新聞朝刊[東京本社] (2022年6月16日掲載、一部改変)の一部である。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(配点比率50%)

「素顔のまま」と政府は言う。「仮面を脱ぎ捨て、自分らしく生きて」という激励ではもちろんなく、屋外をはじめリスクが低い状況ではマスク着用の必要なしという指針のことだ。大学では対面講義が再開し、リモート勤務が入社へと戻り、海外渡航も少しずつ動き始めている。コロナ以前に戻ろうと、社会そのものがリハビリを始めたかのようだ。

ただし、人々の気持ちはてんでバラバラ。マスクひとつとっても、素顔になりたい人もいれば、覆っていたい人もいる。マスク緩和による感染リスクについても、マスク着用による健康被害についても様々な議論があるし、世論調査も拮抗<sup>きっこう</sup>している。リハビリはそう簡単には進まない。

かくいう私はどう思っているのかというと、マスクはもはや自然な風景になっているというのが本音だ。カウンセリングでもお互いにマスクを着用していて、すっかり慣れてしまった。「素顔が見えなくても大丈夫なんですか」とたまに聞かれるが、心というのは表情の足し算で成り立っているものではない。心はその気になったら、怒りも悲しみもマスクをすり抜けて漏れ出てくるし、逆にマスクを外していたとしても、心がこわばっているときには、気持ちは素顔の裏に隠れて出てこない。

心にとって重要なのは安心感であるわけで、そのためにはむしろマスクを着用している方がいい場合もある。思い出すのは、スクールカウンセラーをしていた頃に出会った不登校の女子生徒だ。人が怖い。彼女はそう思うから、学校までは来られても、クラスには入れず、別室登校を続けていた。彼女の前髪は目元まで伸びて、硬くマスクをしていた。髪と布で顔を覆うと、他者の視線を遮断することが出来る。そうやって、彼女はかろうじて登校し、リハビリを続けようとしていたのだ。

医学者上田敏によれば、リハビリテーションの本来の意味は「全人間的復権」にあるという。つまり、ただ昔に戻るのではなく、以前と同じではなくとも、人間らしく生きられる形を見つめることが、リハビリの本質なのである。とはいえ、何ををもって「人間らしく」と言えるのか？

人間が病み、回復する。それは故障した機械を修理するのとは違う。前後で生き方が変わるからだ。たとえば、先の女子生徒は、学校に行けなくなったことで、それまでの自分が無理を重ねていたことを知る。今まで一緒にいた友人が本当は怖かったと気づき、幼いころから続けていたテニスの部活に本当は行きたくなかったと認める。病む前から、自分は人間らしくなかったのではないかと、言いたいことを言えずにいて、素顔だと思っていたものは仮面だったのではないかと。

試行錯誤が始まる。マスクを試みる。ちょっと安心するから、別室にまでは登校できる。そこで、今までしゃべったことのなかった子と話してみたら、気まづくなって、しばらく別室にも行けなくなる。順調には進まない。新しいことを始めようとして傷つき、昔と同じことをしようとしてできない。

それでも、積み重なる試行錯誤の中には、肌に合うものもある。家族に嫌なものは嫌と言ったら、案外わかってくれる。テニス部を辞めて、絵画教室に行くと気の置けない友人ができる。マスクをお守り代わりに、彼女は昔よりも自分勝手に振る舞えるようになる。するとあれだけ怖かった他者が少しだけ気にならなくなる。生き方がほんのちょっと変わる。「人間らしく」とは、自分なりの自由を取り戻すことなのだろう。

私たちの社会も同じような時期にあるのだと思う。コロナ禍の人間らしくない生活から回復しようとすると同時に、コロナ以前の暮らしが必ずしも人間らしかったわけではなかったことにも気づく時期だ。無理してでもやりたいことと、無理せずに済みたいことがせめぎ合う。社会は落ちた体力の中で、自分なりの自由を再発見しようと模索している。

マスク問題はその象徴だ。それがコロナによって強いられたものであるのは確かにしても、この2年でマスクは色とりどりになり、キュートなデコレーションで飾られるようになった。人々はマスクに愛着を抱き、自分らしさを表現する仮面へと育てたのだ。もしかしたら、社会のリハビリ後も、仮面をつけ続けることを選択する人々もいるかもしれない。リハビリは副産物として新しい文化を残すものなのだ。

いや、3年後にこの季評を読み返したら、「マスクしてたね、あの頃」と懐かしく思うのかもしれない。リハビリ中の未来予測はしばしば裏切られる。リハビリとは今はまだ存在していない未来をクリエートする営みであるからだ。あの女子生徒は別室登校を続けながらも、少し離れたところにある高校に進学することを決めた。彼女なりの未来をクリエートしたのだ。その卒業式で私は同じことを言った。「マスクしてたね、あの頃」。彼女は一瞬戸惑い、そして昔を思い出して、ぶしつけに言いたいことを言った。「覚えてへんわ!」。前髪をかき上げ、大きな口を開けて笑ったのだ。

問 1. 筆者は、コロナ禍の後遺症からのリハビリテーションは、本来的にどのようなものであるべきと考えているか説明しなさい。(100字程度)

問 2. 筆者は、マスク着用の有無と感情の伝わり方の関係についてどのように考えているか説明しなさい。(150字程度)

問 3. 筆者は、下線部において「コロナ禍の人間らしくない生活から回復しようとすると同時に、コロナ以前の暮らしが必ずしも人間らしかったわけではなかったことにも気づく時期だ」と述べている。このことについて、自らの体験を踏まえながら、あなたの考えを述べなさい。(400字程度)





Ⅱ 以下の文章は、太田昌国「チャビン・デ・ワンタル、<sup>な</sup>哭く」(『「ペルー人質事件」解説のための21章』現代企画室、1997年、一部改変)の一部である。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(配点比率50%)

ペルーの日本大使公邸占拠事件(※1)については、おびただしい量の報道がメディア上にあふれた。ラテンアメリカの一地域で起こった事件に関して、少なくともその報道の量と持続時間から言って、これほどまでに大量に、しかも長期間にわたって報道がなされた例は、いまだかつてなかった。私も、基本的には小さなメディアの上で、事態の分析を何回にもわたって行なった。いま振り返ってみると、今回の事態をめぐって私が基本としておさえておくべきだと考えたことは、占拠事件直後と武力突入直後にそれぞれ書いた、以下のふたつの小さな文章で言い尽しているように思える。すなわち、「日本大使公邸はなぜ狙われたのか」(『週刊金曜日』97年1月10日号)と「ペルー・日本ともに禍根を残したフジモリ大統領の『武力解決』」(同5月9日号)において、である。

前者において私は、MRTAの社会変革の理論と実践の可否や今次作戦の妥当性いかんは、誰よりもペルーの民衆によって評価と判断が下されるよりほかはないと留保しつつ、単なる「暴力非難」「人質の安否」に収斂<sup>しゅうれん</sup>する報道に抗して、事件の社会的・政治的・経済的背景をこそ熟慮すべきことを主張した。後者において私は、「武力行使賛美」の大合唱とは真っ向から対立する立場から、物事によってきたる原因を少しも解決していないこの「決着」の仕方がペルーに残す傷跡の深さや、日本で台頭している武力行使肯定論と危機管理論のまやかしと危険性について語った。ところで、私の意見は、大小に拘<sup>かかわ</sup>らずメディアの上で公然と意見を表明できた人びとのなかでは例外的な存在であった、ごく少数の人びとのそれと同じく、極め付きの少数派に属しているもののように見受けられる。少なくともマスメディアの主流と、それに誘導された世論の動向との対比で見るとおいては、

(中略)

今回 MRTA が要求したのは「墓場のような監獄にいる仲間の釈放」と「圧倒的多数の民衆に悲惨と飢餓をもたらしている経済政策の変更」であった。

(中略)

現在の世界的な経済秩序のあり方を考えると、G7の会議に集うような産業先進国と、世界銀行・国際通貨基金(IMF)のような国際金融機関は、南の諸国を一国まるごと「人質」にとっているにひとしい。前者が後者に新たな融資を行なう時に条件づける構造調整政策(市場経済化、民営化、政府補助金の廃止、輸出産業の奨励、外資の積極的な導入と優遇措置、そして以上の施策の

上に立つ債務の早期返済)は、「人質」に課せられた苛酷な条件の具体例だ。南北経済格差問題こそが、現在および将来の世界にとっての解決すべき最大の課題だという認識が日頃からあれば、この分野においても日本政府がとりうる施策は具体的に変わっていくだろう。今回の MRTA のような行動が起こるのは、ペルーの社会的不安定性や圧倒的多数の民衆がかかえる絶対的貧困という理由がある。構造調整政策の強制や、弱肉強食原理に基づく市場経済化は、社会をよりいっそう不安定にし、貧困を増大させるだけだ。G7 が世界に強いる経済秩序が、南の諸国を危機的状況に追い込んでいることの自覚が私たちの社会にひろく生まれるならば、対等で公正な経済・貿易関係を南北間につくるための具体的な施策が政府レベルで検討されることは、不可能なことではない。

(中略)

各国間に(とりわけ南北間に)平等で公正な政治・経済の関係をつくりだすこと——そのための不断の努力が私たちの社会の内部と対外的な関係の中で行なわれるようになれば、私たちは、目の前に起こった事件だけではない、そのような事件を生み出さずにはおかない根源に向かって解決の歩を進めることになるのだ。今回の事件の過程では、「人質の安全」を気遣う言動がこれほどまでに社会にあふれた。日本においては、それがまたしても、日本人と日系人の安全への懸念に限定されがちであったという問題は残るにしても、それ自体はおかしなことではない。私たちに必要なのは、現行の経済秩序が続くかぎり、〈関係の絶対性〉の問題として、私たちは特定の地域の人びとを「人質」として捕らえたまま、きわめて一方的な要求を彼(女)らに突きつけているのだという現実への想像力をもつことだ。

(中略)

4月22日白昼(ペルー時間)、ペルー政府軍特殊部隊は、3ヵ月間を費やして準備していたトンネルを伝って公邸内に突入した。兵士2人、人質1人が死亡し、MRTA メンバー14人全員が殲滅された。それぞれの死の状況は、必ずしも詳らかではない。だが、テレビで流された映像を現地で見たと、各メディアで報道された複数の人質の証言に基づくと、次の事実が存在したことには疑いようがないと思われる。軍事作戦終了後、フジモリ大統領は勝ち誇った表情を浮かべながら、邸内を巡回した。1階から2階へ上がる階段の途中には、セルパとロハス(通称アラベ)の死体が転がっており、大統領はそれを見下ろしながら階段を上った。日本ではぼかしが入れられて曖昧な画像になったが、セルパの首は半分だけ切り裂かれ、喉仏が真っ二つにされていた。そしてロハスの首から先は見当らなかった。切り口はいずれも明らかに刃物で切られていた。見せしめに、首が切り裂かれたのであろう。事実、ペルーにおいては、この映像がぼかしもなくこれ見よがしに繰り返しテレビで放映されたという。フジモリ大統領は、こうして、ペ

ルー民衆を威嚇したのだ。

また、特殊部隊が邸内をほぼ制圧した段階で、3人ないし4人の MRTA メンバー(うち1人は女性)は「投降」し、武装解除されていた。兵士たちは彼(女)らを思い切り蹴ったり殴ったりした後、公邸外に連れ出そうとした。「頼むから殺すな」と日本人の人質が叫んだ。「チャビン・デ・ワンタル」とフジモリ大統領によって名づけられたトンネルを抜けて周囲の民家の一角に連込まれた彼(女)らは、そこで処刑されたのだらうと、現場にいた報道者は言う。

フジモリ大統領はもとより、日本政府、マスメディア、少なくない数のラテンアメリカ専門家や危機管理論者、そしてそれらに誘導された「世間」が賛美し歓迎した今回の武力作戦は、以上の現実を併せもつものであった。繰り返しになるが、要約してみる。大統領は、自らの指令によって惨殺された死体とともに意図的に同一のテレビ画像に収まった。高処から見下ろす勝利者のすぐそばに、敗者が無惨な姿で横たわるといふ、唾棄すべき構図をもったこの画像は、繰り返し放映されて、ペルー民衆の脳髓に刻印された。また、生きて捕虜となった以上、現行法上は住居侵入・器物損壊・監禁・恐喝など、問われるべき罪状に事欠かなかつたであろうゲリラ数人は、裁判にもかけられないまま処刑された。「国家テロリズム」が全面的に発動されたことを示すこれらの情報を総合的に手にしえた段階でなお、軍事作戦としてのみならず、フジモリを人格的にも称揚した言動は絶えることはなかつた。「殺人行為」が官民を挙げて、これほどまでに賛美の対象となったことは、めづらしい。(中略)所詮、彼ら(※2)の頭を占めるのは、今回の事件をいかに自らが思う形で日本のために利用するかという関心でしかない。熱烈にペルーなりフジモリなりを論じているようでいて、実はペルーに対する徹底的な無関心がそこにはある。<sup>(a)</sup> フジモリに対して、来るべき未来を見通したうえで「友情あふれる」思いを寄せているとは、とても私には思われぬ。なぜなら、ことさらに憎しみを掻きたてるかのような大統領、すなわち政治的最高権力者の上述の行為は、一時の興奮が冷めてゆく今後のペルーの行く末で、何度でも人びとの胸に思い起こされずにはいられない。交渉すると見せかけて騙し討ち的に貧しい「敵」を殲滅した後で、大統領がかくも喜色満面に自らの権力を誇示したという事実は、深い傷跡となってペルー社会を長いあいだ苦しめずにはおかないからである。しかもすでに述べたように、武力突入によって問題の根源が何ひとつ解決されたわけでもない。ペルー社会の不安定要因は増し、課題は先送りされただけである。

(中略)

占拠闘争に加わった MRTA(トゥパク・アマル革命運動)メンバーの、占拠中および政府軍特殊部隊の武力突入時のふるまいについて、さまざまな報道がなされた。いちいち出典を挙げることは煩瑣<sup>はんさ</sup>なので、おそらく多数の新聞読者の記憶に残っているだろうという前提で、出典を明示することなく、ゲリラに関する特徴的な報道の内容を以下のようにまとめてみる。

一、MRTA のメンバーの中には、16 歳くらいの少女たちがいる。田舎育ちの彼女たちは、

おそらくテレビなどは初めて見たのであろう、任務もそっちのけに、公邸のテレビで放映されるテレビ・ドラマ(メロドラマ)に夢中になっている。

二、占拠活動に参加しているメンバーのなかで、大義を持っているのはセルパ、ロハス(コードネームはアラベ)など4人ほどの指導部のごくわずかなメンバーにしか過ぎず、あとのメンバーは、作戦は2、3ヵ月で終了すること、成功報酬として数百ドル(報道によっては50ドル)が与えられることなどの約束を信じて、参加している。事実、少女たちはその金をもって村へ戻り親孝行するとの夢を人質に語り、小型バスを購入して運転手になるのだと語っていた者もいる。要するに、多くの者は、ゲリラの大義はどこへやら、アルバイト気分で参加していたに過ぎないのだ。

三、人質のなかには、ペルー政府軍の高位の軍人もいた。そのことを知った MRTA メンバーのある者は、占拠作戦が無事終わり、外に出ることができたなら、軍隊に入りたいとの希望を打ち明けた。

四、ゲリラたちはインスタント・ラーメンを好み、また差し入れの和食弁当もよく食べていた。セルパなどは10キロほども太り、ゴリラのようにになっていた。

MRTA と志を同じくする者で、この種の軍事作戦の具体的な経験を有する場合には、純粋に軍事作戦上の問題なり倫理の問題として、これらのエピソードが意味することに言及することができる人もいるかもしれない(中略)。そういう場にはいない私の場合には、別な視点からこれらの報道の行間を読むことになる。<sup>(b)</sup> MRTA にはさしたる「大義」もなかったことを言いたげなこれらの報道にも何ほどの真実が込められていると仮定すると、これらのエピソードには MRTA メンバーの「人間らしさ」が表われていると思ひ、どこかほっとするものを感じた。これらの報道は、いずれの場合にも、嘲笑的・侮蔑的、皮肉めいた口調を伴ってなされることが特徴であった。ゲリラに「大義」があればあったで、非難の言葉を必ずや見つけださずにはおかないマスメディアが、一部のメンバーに見られる(と彼らが判断した)「大義の欠如」を、その「アルバイト精神」を、あたかも高処から論難するかのごとき口調は、私には滑稽に思われた。

ペルーの中央森林地帯に生をうけ、幼い頃からさまざまな労働に従事せずには、自らがその一員である家族が食べることもできなかった生活経験を持つ一少女なり一少年が、この作戦に参加することで「報酬」が得られるかもしれないと期待していたところで、生活のためのその切実な思いを、いったい誰が論難できるというのだろうか? 「大義」に比してそれは「卑小だ」と嗤いたいのだろうか? わざわざペルーまで飛んで、問題の本質に届かぬつまらぬ記事やコメントを送り続け、日本ナショナリズムを強化する人質報道に純化した仕事の「成功報酬」として、ペルーの少女には想像もつかない巨額の賃金を手にすることができた特派員あるいはその種の報道姿勢を指示・煽動した本社デスクに、ゲリラたちの「ささやか」すぎる夢を嗤ったり揶揄したりすることが、いったいできるのだろうか?

報道者が別の意味を込めたかったらしいこの種のエピソードの延長上には、私の考えでは、人



(地域科学部・後期日程)

### 下書用紙(3)

**Ⅱ** 問 1.

(200 字程度)

	5	10	15	20	
					(100 字)
					(200 字)



